

新プラトン主義における象徴の立ち位置と機能

テウルギアとの関わりの観点から

寺島奈那(早稲田大学)

プロティノスに端を発する思想潮流である新プラトン主義は、プラトンのイデア論を敷衍して、〈一者〉・〈知性〉・〈魂〉から成る可知的世界と、物質的な可感的世界の区別を強調した。この構造のなかでプロティノスは、魂が可感的な肉体から浄化されて、知性を経て一者へと上昇する道行きを描いた。プロティノスにおいてこの一者との合一は、自身の徳の向上という人間側の要因と、人間の魂が肉体のうちにあるときでも、一部分は可知的世界の留まっており、知性との関わりを継続して持っているという宇宙論的な要因とから可能になる。対してイアンブリコス、魂の肉体への下降をより重い事態として捉え、魂の上昇は徳の向上だけでなく、象徴を用いた儀礼によって可能になることを強調した。すなわち、肉体のうちにある魂の、可知的世界との連続性を認めないために、プロティノスとは違った方法で、魂が可知の世界に意識を向けられるようになる必要があるのである。そこで必要となるのが、テウルギアと呼ばれる儀礼の実践である。

「神働術」と訳されるテウルギアは、新プラトン主義の聖典とも言われる『カルデア神託』という書に起源をもち、ギリシャの多神教における魔術的祭儀を意味する語である。新プラトン主義者の中で最初にテウルギアについて言及し、『カルデア神託』について最初に解釈したポルフェリオスは、テウルギアを魔術的なものと見なし、否定的な態度をとった。対して後継のイアンブリコスは、テウルギアを哲学的理論と合致させて展開させた。彼はテウルギアの魔術的な側面ではなく、プラトン以来続く哲学の目的である魂の上昇、すなわち人間の魂を神々へと上昇させる修練的な側面を重視した。その際問題になるのが、魔術的と思われかねない物質を用いた儀礼の数々であり、これらをどのように哲学的に説明するかがイアンブリコス『秘儀について』の重要なトピックの一つとなった。

イアンブリコスは、儀礼に用いる物質を「象徴」として扱うことでこれを処理しようとする。すなわち、この世界の物質は何らかの神の力や働きを表しており、象徴的な物質を用いることでその神の力に与る、という考え方である。この象徴は、神の「容れ物」として機能し、神がこの世に顕現するための受容体としての役割を担う（『秘儀について』V.23）。このような象徴を適切に扱い、儀礼に用いられる物質を通じて神々の顕現をみる神働術者は、物質的な可感的世界ではなく、可知的世界の方へと向け変えられる（『秘儀について』IV.2）。ここでさらに、イアンブリコスが「神の表象を適切にまとうことができる」と述べている点に注意したい。Shaw が指摘するように、神の創造物であるという点において、肉体をもった人間も、石や植物と同様に象徴として、神の容れ物として機能する。その際、もはや人間の魂は可感的世界の秩序の中にいるのではなく、デミウルゴスがこの世界を秩序づけたのと類比的な仕方で、可感的世界に対する秩序付けを行なう立場になる。このように象徴という概念を導入することで、神への合一に向けた道行きにおける物質および可感的世界の意味・価値を再評価することができるだけでなく、ある種の「エリート主義」とも批判されるプロティノスの魂の上昇の

方法と比べて、より大衆に開かれた上昇論が可能になる。

しかし、象徴として論じられているその内容が、新プラトン主義の存在論の構造においてどのような立ち位置にあるのか、またその構造の中でどのような機能を果たすのかは未だ研究の余地がある。特に、人間が神の象徴として働くという点について、構造的な整合性、および内実が明らかになっていない。昨今、テウルギアに関する研究書が盛んに出版されている。Addey はポルフェリオスとイアンブリコスの対立についての再解釈を示し、Döbler は歴史的な立場から儀礼の具体的内容について分析し、Uždavinys は神働術の源泉であるエジプトの儀礼を辿りながら、神働術と哲学の関係の再構成を試みている。Shaw の著作は哲学的な枠組みの中で、テウルギアにおける肉体と魂の機能を説明した画期的な著作ではあるが、上記の最新研究においてその恣意的な構造化が批判されている。

本発表は、上述のような研究状況を踏まえたうえで、象徴というテーマを中心に据え、テウルギアと新プラトン主義的世界構造、特に可感的世界と魂の上昇の関わりを再考するものである。本研究の特徴的な点として、イアンブリコスの他の著作、特に『ピタゴラス的生について』における象徴の用法に注目し、『秘儀について』における象徴との整合的な読みを図る点、神との合一へと向かう人物が他の人に対して行う働きかけに注目する点である。後者の観点は、上述の神の象徴としての人間という論点に関わるものである。これらの研究を通じて、新プラトン主義の一者との合一に関して、個々の人物における上昇だけでなく、人間が協働しておこなう上昇の側面に光が当てられると予想される。

【参考文献】

Addey, Crystal. *Divination and Theurgy in Neoplatonism: Oracles of the Gods*. New York: Routledge, 2014.

Shaw, Gregory. *Theurgy and the Soul: The Neoplatonism of Iamblichus*. 2nd ed. San Rafael: Angelico Press/Sophia Perennis, 2014.

Tanaseanu-Döbler, Ilinca. *Theurgy in Late Antiquity: The Invention of a Ritual Tradition*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2013.

Uždavinys, Algis. *Philosophy and Theurgy in Late Antiquity*. Hillsdale, NY: Sophia Perennis, 2008.